

佐伯史談

第八十二号

「郷土史研究」誌
通算第百九十四号

昭和四十六年一月十六日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字橋垣字龍護寺 羽柴方

巻頭言

年頭所感

佐伯史談会

会長 高水 嘉吉

多事であつた昭和四十五年を送つて、清新な気持ちで昭和四十六年を迎えた。会員会友の各位も目出度く迎年され、昨秋には同慶の水筈である。

昨年を回顧する時、会員各自の趣味として又敬養としての郷土史探究の旅は、過去十余年の積重ねの上に立つて、より広くより深く進められた。こうして会員の研修は、地域社会の埋もれた文化財の発見、現存文化財の保存顕彰、史蹟名勝の観光宣伝等に寄與貢獻して、それぞれ感謝されている。

私がかねて我々の研究の行き方として一般的な面を広めると共に、或る部面については深く究めて行く。所謂エグゼリシシング、イン サムシング、を提唱しているが、本年も左様でありたいと思つてゐる。そして深く研究したサムシングについて、機関誌に発表して、他の会員に研究の成果を伝えてほしい。

お互いに郷土史研究の専門家ではない。素人の集りである。機関誌の原稿の玉石混在は当然のことである。機関誌に会員の会話の場としての色彩を持たせたいと念じてゐるが、多数の会員の寄稿によつてこの願いが果たされ、更にうるおいと活気とローカルカラーが盛り込まれるであらう。

会の行き方に物足りなさを感ずる声もある。それ日研究の進んだ会員から出るもので、私達はこれらの声を胸にたたんで、会の運営がマンネリズムに陥らぬよう、日に新たな日々を新たにあらる決心掛けたい。

しかし会は趣味を同じくする者の、自由な集りであることを忘れてはならない。会に加入し、会員として行動することが、大らかで楽しいものでありたい。研究といつても、雑に命ぜられるものでなく、

本号内容

- 巻頭言 年頭所感（高水嘉吉）……………一
- 履歴 毛利神社の再建と山田平家……………三
- 研究 勇士寺講堂（岩田善市）……………四
- 研究 西評省南覚住法御改一件（櫻井）……………七
註 井川出陣庄屋文書
- 研究 佐伯と因水田歩（山本保）……………二五
中根祥光、三ノ丸
- 研究 蟹河場湯と塩浜（安部カ）……………二九
一 西宮役所にかゝる圖書……………三〇
- 踏査記録 林山下登るの記……………三九
- 研究会内（はた見）白井一野津と武吉……………四〇
- 巻末 寄附料表、新入会員紹介……………四一
- 本年度会費について……………四二
- 一 編集後記……………四三

全く自発的で自由なものである。会の空気が研究という名の何かを背負わされて、窮乏であつては会は長続きしない。

一月の研修踏査では、参加会員各自の受け取り方は十人十色である。広く深いことが望ましいが、それは誰にでも出来ることではない。広いが浅い人、深いが狭い人、等々人さまざまであらう。そうした中で趣味が充たされ、教養が深まつて行けば結構である。団体行動で時間制限がある。時間が足りずに自分の十分な研究が出来ない、物足りなささばもつとものだが、それはサムシングとして日を改めて独りで出向いて、心ゆくまで調べればよい。

私は今年の研修の方向として、郷土の風土の更に地についての研究の推進を提唱したい。殊に歴史の基盤である地理の把握に力めたい。史書を読むとき地理が明らかでないため、どうもびつたりしないもどかしさを感じるのは私一人ではあるまい。遠隔の地を一つ踏査することは出来ない相談であるが、せめて郷土のそれについてよく知悉して欲しいものである。郷土の国道、県道程度の所は大體知つてゐるが、それから一步踏み込んだら未知の土地ばかりである、と言うのは郷土史に志すものとして心許さない話である。

年頭一月三日、おが史談会及恒例の新春初歩きとして椿山登山を行つた。十余名の会員が参加して予定通り踏査を終つた。その收穫は各人各様であらうが、私は以下に記す採収收穫があつた。

山上からの眺望は天下一品、絶佳の一語に尽きる。頭を回らすだけで九州の各地が視界に入り地理がよくつかめる。殊に郷土の地理は掌の上を指さすように印象づけ

る。これは第一の收穫であつた。

次に、私連日山頂に達する前には、横線谷の横道をかき長く歩いたが、これは因尾及び川登方面に通ずる昔の街道であることがわかつた。こうした昔の道は段々湮滅してあからなくなりつつあるが、消滅しないうち踏査して確かめおきたいものである。此の道と現在の番匠川沿いの県道を比較した時、昔県道沿いに進むとすれば、或は断崖にはびまかれ、或は水車を渡渉する等の困難に遭遇したであらう。山は稜線を交通路とすることによつてそれらの困難をまぬかれ、更に展望のきく稜線を通ることによつて、一方因尾、中野、上野方面、他方川登、明治方面の目ざす所は任意に降り行けたことであらう。こうした道は昔の人の、生活の知恵によつて形成された貴重な遺跡である。

もう少し考察を進めたい。古代人は山上の台地に王を構へることが多かつた。現在人の住んでゐる平地は未だ形成されてゐないか、或は溼地で生活に適しなかつたが、高地は土地高燥で日当りがよく、蠶蠶毒蛇其の他の毒虫の害も少なく、住みよかつたからであらう。天孫降臨伝説の地高千穂など々のよい例である。

椿山の中腹にある風戸かざとの部落は、現在七八戸に減つてゐるが、盛時には八十余戸を数へる大部落であつた。又この風戸と反対側の長畑部落（外生町）も、高い所から低い所へと段々に家々出来た大部落である。何れもこの道を交通路として発達したものと思われる。長畑は目下平地への移住が盛んに行われて、風戸と同じ勢きの中にあるのも時代の流れてゐる。

これらの考察によつて昔の人が、因尾、中野方面が政府内に行く場合、背後の山を越して川登に出た、府内を這いよるのにはしたことが、実感を得た。

以上は私の椿山登山に伴うささやかな収穫であるが、同好の士と共に御土の各地を歩いて、こうして左理解を深めたいと念じている。(おわり)

隨想

毛利神社の再建を望む

前 神社参拜の逸話を二、三

山 田 平 之 丞

(平会樂明、佐伯市中央区)

毛利神社は佐伯町の肝煎で、矢筈会も骨折つて、旧佐伯城々山天守閣趾に創建され、昭和四年四月六日鎮座祭が執り行われられた。祭神は豊後国佐伯藩主初代高政公六代高慶公、八代高標公、そして十一代高春公の四柱。普通は新しい神社の鎮座祭には、概ね次のような祝詞が斎主によつて奏上される。(書き下しの普通文になおす)

掛まくも畏こき何々神社の大前に社司(社掌)位敷功
爵何甚恐及恐及も曰く大神の天の御蔭と隠りまさ
む瑞の御殿 清く美しく造り仕へ奉りせへぬるに依
りて 今日の吉き日の吉き刻に還し鎮めませ奉りぬ
是をもちて禮代の御食御酒 経程の物を置足してた
て奉るさまを 平らけく安らけく聞かして 今より
徳志大御心平徳に此大宮を静宮の安宮と長久に鎮座
せと 恐美恐美も白す

神社が政治に直結していた場合には、神社の祭典に成るの神社の社格に依りて、勅使、地方長官等が供進使として参向、又てぐらを奉る。その祭式の行事開扉開扉

神饌の献徹、御幣物の献徹、祝詞奏上、玉串奉奠等極めて莊重。司々の作法亦嚴肅であつた。供進使には随員二名を附して居るのだが、ともにとも神前の一の失態なきよう、心をこめて仕えまつるのである。

つねづね作法の習熟には急りなきよう努めて居るもの、練達堪能の域に達することは至難である。特に装束と着、冠をかぶり、履を履き、袴をきき、帯をきき、常時と異なる服装をするのだから、ヒヤツとさせられる場合が多い。(装束の色合は勅任日悪、巻任日紺、判任日縹である) 履はしたうづきはいた足をそのままさしこむのだが、時にぬけることがあるが、前もつてかかる場合の助け舟に異式ではあるけれど、紙箔のぞうりを用する。これはと大丈夫で、立居は装束の裾をふんで、よみけるといふことにはないが、安心ならぬ日冠である。随員のかぶる冠は自家専用のものでない。簡什のレディメードであるから、その人の頭の太さと、冠のサイズがピッタリと合わない。

冠の方が太い場合は、中に紙などまげて入れて、七うと合うようにするけれど、頭の方が太い場合には、そういうわけにはまいらぬから、冠は千ヨコナンと頭上に小さくのせたかたちとなる。だから礼也擲の場合に、細心の注意を払って居ないと、冠とてはすおそれがある。日賜の八幡様のお祭に某随員がこれをやつた。此の大失態に、うるたえを狼狽のあげく冠を前後にかぶつた。饗進使が目撃で知らしても、御本人一向さくらぬ。瑞然笏をもちてすまして居る。兼備をきわめた祭典の満場哄笑をうすまくとはいへばでなシーンとなつた。

祝詞奏上の後に玉串奉奠がある。(玉串とは玉向串の約といふが擲の枝に木綿中子をつけたもので神に奉る。美めて玉串女といふ)